



## 日本代表 4 名を決定

国際地学オリンピック、タイ大会



代表に決まった青沼、田中、河村、大野の 4 選手（筑波研修センターにて）

今年 8 月 8 日から 17 日に、タイのカンチャナブリーで開催される第 12 回国際地学オリンピックに派遣される日本代表選手が 3 月 19 日、国際地学オリンピック日本委員会から発表された。派遣が決まったのは、青沼恵人（筑波大附属駒場高 3 年）、大野智洋（甲陽学院高 2 年）、河村菜々子（高田高校 3 年）、田中匠（栄光学園高 3 年）の 4 選手。日本代表に女子生徒が選ばれたのは、初参加だった 2008 年の第 2 回フィリピン大会の日野愛奈選手、2011 年の第 5 回イタリア大会の渡辺翠選手に続き 3 人目。

日本代表の選考過程全体は、日本地学オリンピックと呼ばれ、昨年 12 月 17 日に開催された予選に始まった。予選では、1903 人が参加。この成績優秀者 59 名が、3 月 11 日から開催された本選に挑んだ。代表は 3 月 13・14 両日

に開催された、本選の上位 10 名による代表選抜試験で決定された。

今大会では代表と同じ日程で国際地学オリンピックに参加するものの、メダル受賞の対象とならないゲスト選手 2 名も派遣されこととなり、尹杰（いん・じえー；佐賀県立佐賀西高 3 年）、野村海斗（筑波大附属駒場高 3 年）が選ばれた。ゲスト選手の派遣は 2015 年以来 3 回目。

本選では代表やゲストの選考以外に、成績優秀賞の表彰が行われ、総合成績 1 位の田中選手に茨城県知事賞、女子の総合成績 1 位の河村選手に日本地球惑星科学連合賞が贈られた。総合成績 2 位には、受験時中学 3 年だった大野浩輝選手（筑波大附属駒場高 1 年）が入り、中学生の最優秀選手に与えられるつくば科学万博記念財団理事長賞授与されたほか、岩石・鉱物の鑑定成績 1 位に与えられる産業技

術総合研究所地質調査総合センター特別賞も授与された。

代表 4 選手とゲスト 2 選手には、今後、通信研修や合宿研修を通じた強化が行われる。地学オリンピック日本委員会の瀧上理事は、「このところ日本は、国際大会で複数の金メダルを獲得し、トップクラスの座を確保しつつある。この流れが維持できるよう、選手強化に力を入れていきたい」と話している。

.....

## 開催地カンチャナブリー

2018 年の国際大会の会場は、タイの首都バンコクから西に約 120 km の所にあるカンチャナブリー。この町は第二次大戦の映画「戦場にかける橋」の舞台となったクウェー川鉄橋で知られる。地質学的には、ペルム紀から三畳紀の石灰岩によるカルスト地形が発達している。会場となるのはタイの最高学府であるマヒドン大学のカンチャナブリーキャンパス。1998 年に開設された新しいキャンパスで、熱帯医療学部や獣医学部などを擁している（3 面に関連記事）。



カンチャナブリー大会のロゴ

【今号の紙面】日本代表の抱負（2 面）。本選期間中の様子。タイ大会、韓国大会。（3 面）。OB・OG による運営への関与。リレーエッセイ（4 面）。

# いざ、カンチャナブリーへ！

## 世界中の地学好きと存分に楽しもう

### 実践的な学習をしていく

今年度は本選に向け、かねて興味があった固体地球・地質分野に加え、気象や天文分野に於いても幅広い知識がつくよう学習をしていきました。その結果、本選では各試験とも良好な成績を収めることができました。しかし、化石鑑定で基本的な問題を誤答するなど、経験不足を痛感することも多くありました。

本選の行事で最も心に残ったのは筑波山訪問です。筑波の地に鎮座する筑波山は、古来より信仰の対象となっただけではなく、ジオパークにも登録されるなど地質学的にも興味深い山です。このようなフィールドに行き実際に地層の観察をするという機会を得、実地の裏付けにより自身の知識も深みを増したと感じました。これから、研修や国際大会などで実地で観察・観測を行う機会がままあることと思われます。観察技術は勿論のこと、实地観察を通じてしか得ることができない経験は多々あり、それらは将来の研究などにきっと役立つはずです。これから、八月にタイで行われる IESO に向け、地学に関する各分野を、より深くより実践的なものとなるように学習していく所存であります。金メダルを目指して頑張りますので、宜しくお願いします。

青沼恵人（筑波大附属駒場高3年）

### 世界の地学オタクと競い合いたい

元々自分は天文分野に興味がある、いわゆる天文少年であった。天文の研究をやろうと思って入った物理研究部という部活で、地学オリンピックのことを知ったのは中1のころだった。その後毎年のように地オりに挑戦してきたが、予選通過すらできなかった。

今大会、このままではまずいと思い、ひたすら地学を勉強した。苦手だと思っていた地質なども、実際に友人と城ヶ島の巡検をしてみて、過去のイベントや環

境について、ああではないこうではないと考えることに、面白さを感じた。

受験科目として受ける人が少ないというだけで学校では話の通じる相手の少ない地学の話題だが、本選ではもちろんそんなことはなかった。好きなだけ地学の話ができるどころか、地学の話題で絶えることがない。そんな環境で4日間も過ごすことができ、とても幸せだった。タイ大会では、世界中の地学オタク達と会い、競いあえる。言語の壁はあるだろうが、積極的に臨んでいきたいと思う。

田中 匠（栄光学園高3年）



留学生と話し合う本選参加者  
(筑波研修センター)

### 三重大会ではボランティアでした

今回副賞で頂いた見惚れてしまうほどあまりに美しい地球儀は、私にとって一生の記念の品です。本選では様々なバックグラウンドをもった生徒達との交流がとても刺激的で、2回の参加を経て自分の世界が格段に広がりました。地学を通して仲間達や先生方と多くの出会いがあり、私の高校生活は今まさに楽しみに彩られています。

IESO2016 日本大会が地元三重で開催された時、私は三重大で行われた開会式と閉会式にボランティアスタッフとして参加しました。ノルウェーチームを担当し、扇子に漢字を書いて渡したりして楽しく交流しました。今度は立場が逆になり、選手として参加できることが本当に嬉しいです。開催地では多くの人が随分

前から会議や準備に時間を割き、選手団に会えるのを楽しみにしています。その大変さをわかっているのも、タイスタッフの方々に感謝の気持ちを伝えたいです。日本大会の表彰式では金メダルを渡す役を務めました。タイ大会では金メダルをかけてもらえるよう頑張ります!!

河村菜々子（高田高校3年）

### 先輩達がまぶしかった

私は小学生のころから岩石や鉱物、気象や宇宙が好きで、地学オリンピックに参加したのもその延長でした。予選突破を目指し勉強していく中で、知識の断片がつながり、地球科学や天文学全般について体系的に知ることができてよかったです。

本選には中2から参加していました。本選で出会った先輩方、特に日本、フランス大会の代表の方はまぶしく、私は憧れめいたものを持っていました。ただの中学生でしかなかった私に様々な情報を教えていただいた先輩方に会えたことは私にとって本当に大きな財産です。高校生として初めて参加した今年の本選も含め、どの年も非常に楽しく、大いに刺激を受けました。今年、金賞を受賞した仲間と濃い時間を過ごせたことは、表立った地学好きの少ない学校に通う私にとって良い経験だったと思います。

国際大会ではメダルを狙い競い合うのはもちろんのこと、それぞれの国の地学事情を交換したり、また雑談することが楽しみでなりません。

大野智洋（甲陽学院高2年）



地質の説明を受ける本選参加者  
(地質標本館)



# 最先端の地球科学を堪能

## とっぷレクチャーと研究所見学を満喫

今年3月に茨城県つくば市の筑波大学など行われた本選は、大会名称を「グランプリ地球にわくわく2018」と称し、試験以外にも専門家によるレクチャーや、会場周辺の研究所見学などのイベントも開催された。

このうち、地球科学の専門家が最新の研究成果について話す「とっぷ・レクチャー」は、選手以外に事前登録した一般参加者も聴講した。講演のうち、藤原智氏（国土地理院）は、2016年の熊本地震では地震は起こさないものの、周辺の断層の動きに影響されて動いてしまった断層である「おつきあい断層」が発見されたことを紹介。活断層の活動が地震の原因だとする教科書的な考え方が変わりつつあることを、衛星観測や現地での掘削調査の結果に触れながらわかりやすく話した。

また、産業技術総合研究所の高橋雅紀氏は、昨年放映されたNHK番組「ジオジャパン」で取り扱われた東日本の圧縮について、その原因を紙の模型を使って説明。参加した高校生に突き詰めて考える姿勢の重要性を述べた。

このほか、とっぷ・レクチャーでは、筑波大学の鎌田祥仁氏が放散虫化石から分かる大陸や海洋の変動、また、国立科学博物館の甲能直樹氏が最新の研究で、ゾウがイワダヌキと同じ祖先を持ち、もともと海にすんでいた生物であったことが明らかになってきたことを話した。

研究所見学は、12日の午後と13日の午前中、本選参加選手対象に行われ、国立科学博物館、防災科学技術研究所、国立環境研究所、地図と測量の科学館（国土地理院）、地質標本館（産業技術総合研究所）、筑波山地域ジオパークなどをグループ別に訪れ、研究者等の話を聞きながら見学した。いずれの見学でも、参加選手からは活発な質問があった。



スパコンの配線について質問する参加者（国立環境研究所）

## OB・OG との懇談

### 国際大会の雰囲気伝授

本選期間中の3月12日の晩、本選参加者とOB・OGとの懇談会が開催された。懇談会では、日本代表だった宇野慎介氏（東大理3年）と杉昌樹氏（京大医3年）が、参加した第8回スペイン大会の様子を、パワーポイントを用いて紹介。本選参加者達は、OBの生々しい体験談を真剣に聞いていた。

OB・OGからはこのほか、進学先の大学での勉強や研究内容、学生生活についての話もあり、これから進路を決める本選参加者には大きな刺激となったようだ。参加者に対する本選に関するアンケート

では、地学オリンピックの魅力が深まった、大学での生活や研究については詳しく知らなかったので勉強になったなどの感想が寄せられた。



国際大会の様子を聞く本選参加者達

## タイ大会の日程

タイ大会の実行委員会は今年2月15日に現地で地元のマスコミを対象とした記者会見を開催し、大会の開催概要について説明を行ったほか、ニュースレターやホームページ上で、開催の準備状況を順次紹介している（<https://ieso2018.posn.or.th/>）。これによると、大会は8月9日に開会式、10日に巡検、11日に筆記試験、12日に実技試験、13日に国際協力野外調査（ITFI）、14日に巡検とITFIおよび地球システムプロジェクト（ESP）の準備、15日にITFIおよびEPSの発表、16日に閉会式という日程が予定されている。

選手達の試験などはマヒドン大学の施設で、役員の会議や採点作業はバンリムクウェーリゾートで行われるという。

.....

## 2019 年代表の選考

国際地学オリンピック日本委員会は4月2日、2019年の韓国大会に向けた日本代表の選考過程である、日本地学オリンピックの日程について発表した。これによると、予選の募集期間は今年9月1日から11月15日。予選は12月16日午後、本選は来年3月10～12日、代表選抜は同12～13日に開催される。参加を考えている生徒や、その保護者、先生方は、ホームページやFacebookの当会アカウントを随時チェックして頂きたいと、日本委員会では話している。

.....

## ジオラジオ開設

地学オリンピックのOB・OG会では、地学をテーマにしたラジオ、「ジオラジオ」を開設した。ジオラジオでは、過去の国際大会の様子や、大学入試で地学受験を選択した体験談、その他、様々な地学ネタを紹介している。年齢や性別に関係なく、興味あるリスナーからの質問を受け付けているので、地学に興味のある方は是非一度、「ジオラジオ」で検索、視聴して頂きたい。

ゲスト参加選手からもひと言ずつ！

素晴らしい先生方と出会い、素晴らしい友達と出会い、目から鱗の4日間を過ごしました。初めて最先端の研究の講義を聴き、初めて地学大好きな高校生と接しました。地学オリンピックに参加していなかったら人生どれだけ損をしていたか、考えるのも怖いぐらい、自分の世界が広がった、本当に本当に貴重な経験でした。今まで、(たぶんこれからも)支えて下さった事務局の先生方、スタッフの大学生の方、高校生、中学生のみなさん、今まで本当にありがとうございました！(尹 杰;佐賀県立佐賀西高3年)

カンチャナブリーのあるタイ中部では、一番暑いのは4月で僕たちが行く8月は雨季なので、湿気を我慢すれば、8月の東京よりも過ごしやすい…かもしれないということです。毎年、夏休みには暑さで脳みそが溶けそうになっているのですが、今年の夏は、溶けるのではなく、問題を解くように頑張ります。僕はゲスト生徒として参加するので、メダルとは関係ありませんが、自分なりにタイで何かを得てこれたらいいなと思っています。(野村海斗;筑波大附属駒場高3年)

世代交代の進む地学オリンピック

川村教一

(本会理事・秋田大学教育文化学部)

国際地学オリンピックへの初参戦である2008年から今年で早くも10年が経ちました。この間、日本開催となった2016年大会を成功させ、日本代表は国際大会で国・地域別でトップクラスに定着しつつあるなど、日本の地学オリンピックは躍進を遂げたと言って良いと思います。これもひとえに、頑張ってきた選手の皆さんと、それを支えてきた学校の先生方、ご家族の皆様、地学オリンピックに協賛して頂いている企業、各種団体の皆様のおかげで、改めて感謝申し上げます。

10年という歳月的一方で、世代交代も確実に進んでいます。初期から携わってきた先生方は徐々に大学、高校を定年によって去ろうとしています。今後とも、こうした先生方にはサポートをお願いしたいところですが、若い世代の先生方の参加をお願いしているところです。また、最近嬉しく感じているのは、地学オリンピックのOB・OGの運営への参画です。国際大会には残念ながら出場できなかったOB・OGのご協力も得ながら、今年の本選は運営されたことをご報告するとともに、より多くのOB・OGの参加をお願いしたいとお考えしています。



NPO 法人地学オリンピック日本委員会  
ニューズレター Chiorin! (no. 19)  
平成 30 年 5 月 20 日発行  
発行人: NPO 法人地学オリンピック日本委員会広報部会  
編集長: 萬年一剛 (広報副主査・神奈川県温泉地学研)  
〒113-0032  
東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル 3F

今号のリレーエッセイは地学好き高校生に人気の Quro さんにご投稿頂きました。